

川柳 (志布志川柳会)

なるほどと誰もわからんピカソの絵
ボデービルどうだ見ろよと力こぶ
はねつけて会話にならぬ倦怠期
生活費足りぬ年金かじる税
納税が減っても減らぬ無駄使い
納税に悩む話がうらやまし
お金より身体第一願う歳
財なくも強き身体が子ら育て
不景気にアベノミクスが期待され

赤池 忠重
高田 秀雄
福山 吉連
坂元 俊幸
高田 昭秋
末永 一雄
江藤 房子
上東マキエ
内山 幸夫



「かぎひき」



安楽山宮神社の正月踊り

短歌 (はなさい短歌会)

まが玉の触れあう音が目を閉じてタグリ岬に思いを凝らす
成長の早いひ孫を椅子にかけやと抱っこしあやす幸せ
そっけない返事は苦し人形はつくり笑いのままで寄り添う
好物のよもぎの餅を送ったと受話器の奥の母の雪空
目を閉じて聴くメヌエツト失いし宮庭舞踏会の手帳は
列島の海岸線をなぞりつつ機上に波の荒き音聞く
「地球へのやさしさ」論ず二十五Cの部屋に積った冷たい文明
紅梅の花笑みにしてメッセンジャー春立つときをほころび初めし
裏町の店の名前はユーターン袖ふれあいし人と語りぬ

南 史郎
牧 愛子
江口さくら
目高 禎子
篠田 紀子
折田 縫子
中園 茂甚
西 恭子
肥後 洋子
立花 朱

短歌 (南船志布志短歌会)

並びゆく掛声たかき空手の子ら初日待つ間の渚に猛る
死ぬまでは平気で生きよと百舌喋けるそうはいかぬ婆婆たもの
元日の行き交ひよそに志布志湾独り占めして釣りする翁
成人の孫の振袖はなやかにシャッターチャンスに笑のこぼるる
現世で相見見えるはありやなし白寿を祝う写真に収まる
遅れたる年賀の返礼ベルの鳴る生確かむる旧姓で呼び
出歩くも億劫なりしよ老い吾の杖に縋りてそぞろ庭辺を
残しようの色を保ちて咲き残る冬のコスモス空が見てみる
鯛の身すりつつ覚えし母の味いつしか得意の一品となる
大鉢にあふれんばかりのシャコバサボテン千の紅よろづをてらす
おだやかに初日射し込む縁側に八十路のふたり猫と日向ぼこ
こおろぎの母子なるかや歩みよるまた来ておくれ母の幻
山川を幾つか越えし己が身よ八十路過ぎても思ふ事あり

竹永 南海
暉峻 康瑞
池ノ上一枝
岡元 初子
児玉 末子
林 静子
平川 澄子
益倉 睦美
松下 芙美
宮原 順子
山田 和子
山元ハツミ
若松田鶴子

Miyakonojo imata
shibushi
定住自立圏 第11回

◆平季基の墓

大宰府の役人であった平季基は、万寿3年に日向国諸県郡島津に赴任し、開発した荘園を撰閑家に献上しました。これが「島津荘」とよばれる薩摩・大隅・日向にわたる日本一の大荘園へと発展し、この地域一帯の基礎となりました。その平季基の墓が、末吉町南之郷橋野にありま。季基は娘婿の肝付兼貞に「島津荘」を譲り橋野に退いて、若一神社を建て司官となりました。近くの祠からは平季基の木像も見つかっています。



平季基の墓

◆国境の争い

大隅と日向の国境であった曾於市では、かつて多くの領地争いが繰り広げられました。特に天正元年の戦では北郷方と肝付方が激しく争い、肝付の大將であった志布志地頭、肝付竹友も討ち取られました。その墓は末吉町南之郷にひつ

都城市、三股町、曾於市、志布志市で形成する「都城広域定住自立圏」。この圏域の活性化に向けた取り組みや魅力を、各市町の広報紙にシリーズで掲載します。今回は、曾於市を紹介しします。

そりとたらずんでいます。

◆旧都城県参事(知事)官舎

明治初期のわずかな期間、曾於市は都城の一部でした。その都城県初代参事、桂久武が暮らした官舎が、大隅町月野にあります。この建物は都城県の廃止後に大隅町岩川の岡留商店の所有を経て、明治17年に現在地に移築されました。



移築された旧都城県知事官舎

◆過去から現在へ

曾於市の歴史・文化財は、この都城定住自立圏の歴史抜きには語れません。これからも、この圏域に生きる者同士共に手を取り合い、時には競合しながら新しい歴史を紡いでいきたいものです。

問い合わせ先：曾於市 企画課
TEL: 0986-76-8802

市長コラム 空田修

『フクシマ』の今を伝えたい!

「志」エッセイ大賞受賞の穴戸さん
2月23日、市文化会館で第4回志布志市「志」エッセイコンテストの表彰式が、生涯学習推進大会の中で行われました。今回は日本全国から、さらには台湾やオーストラリアからの作品もあり、全部で2016点の素晴らしいエッセイが寄せられました。
今年の大賞は「父の桃」という題で福島県在住の、穴戸哲郎さん(36歳)の作品でした。
ご承知のとおり、福島県は東日本大地震の影響で原発事故が発生し、かの地の農産物は風評被害等により一大打撃を受け、被災地も除染等の復興作業が進められています。

穴戸さんとは表彰式当日にお会いすることが出来なかったのですが、翌日、私が第3回Show-1グランプリが開催された県民交流センターに志布志黒豚三昧丼の応援に行った際、私を訪ねてくださいました。そのときに聞いたお話に私は驚きました。

なぜわざわざ志布志に足を運んでくださったのか聞いてみたところ、もちろんエッセイで大賞を受賞したことがその理由ではあるのですが、それとは別に「福島がカタカナの『フクシマ』そのことを取り戻そうと地域は懸命に

頑張っている。さらに風評被害を完全に払拭する作業が完了したということ伝えたい」という「志」を持つ鹿島まで来たとのことでした。さらに彼は、以前テレビで放映された「田原坂」という西郷隆盛の生涯を描いたドラマを見て以来、西郷さんの信者となったとのことでした。そのドラマを何度も何度も繰り返し見て、「西郷隆盛が切腹に至った時の心境、そしてまた自刃させるに至った新政府軍の薩摩出身の兵士たちの心境、その中に肉親の情愛やこのような流れになった悔恨の極みの気持ちを汲み取ることができ、その場面ではいつも涙を流すほど感銘を受けた。西郷を始め、多くの偉人たちが育んだこの『サツマ』の地を訪れることができている」と話してくださいました。幕末には会津藩の敵であった薩摩藩の志士とその地を、会津・福島の若者が敬愛し、「志」を持って訪れたことに、不思議な縁を感じずにはいられませんでした。
穴戸さんの作品についてはエッセイコンテスト入賞作品集に収められています。ぜひご一読ください。
さて皆さん、いよいよ尚志館高校が甲子園に挑戦します。1つでも多く勝って欲しいという気持ちはありますが、まずは出場できたことを喜び、最大限の応援をしてまいりたいと思います。市民の皆さんもどうぞよろしくお願いたします。